

松下幸之助記念財団 研究助成
研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】 曹 貞恩

【所属】 (助成決定時) 東京大学

【研究題目】

中国医療伝道協会と近代中国社会

【研究の目的】 (400字程度)

近代中国において、西洋医学を担当していたのはプロテスタント医療宣教師であった。医療宣教師とは、宣教活動とともに医療事業を行った宣教師を意味する。中国の医療が遅れていると考えた宣教師らは、医療を手段とした伝道が特に有効であると判断し、活発な活動を行った。そこで全中国で活動していた医療宣教師の集まりである中国医療伝道協会〔博医会〕は、医療活動・慈善事業・漢訳西洋医学書の編纂・医学訳語の統一などの事業を通じ、近代中国社会と医療に大きな影響を与えた。そのため、中国医療伝道協会に関する研究は、中国の近代的医学の形成過程を知る上で欠かせない課題であるといえよう。とくに本研究では、中国医療伝道協会傘下の中薬学委員会の活動を中心に、医療宣教師の伝統医学に対する認識がどのように形成され、変化したのかについて検討することで、伝統医学と西洋医学が互いに如何なる影響を与えていたかについて明らかにした。

【研究の内容・方法】 (800字程度)

【研究の内容】

初期の医療宣教師の中薬に対する研究は、中国伝統医学を深く理解するための作業ではなく、医療活動においての現実的な問題を解決するための手段として、必要に応じて行われるものであった。西薬が不足している状況下、西薬の製造に使える中薬を把握して、積極的に利用するしかなかったからである。しかし1920年代前後からは、単純に西薬の製造に使えるものだけではなく、さまざまな中薬を調査・実験し、その価値を明らかにしようとする雰囲気が見られた。この時代の中薬研究は、医療宣教師の医療活動での必要性という元来の目的から徐々に離れ、それ自体で重要な研究領域となったといえよう。また、薬効が科学的に判明したものは、西洋でも広く使われるようになった。

先行研究では、医療宣教師の中国医学に対する認識が時代によって変化したと述べているが、医療宣教師が残した文章からみると、伝統医学を批判する者と、伝統医学に興味を示す

者は、どの時代にも存在していた。また、中薬のように、治療効果があることが確実にわかった分野もあり、その場合には、治療効果を科学的に究明することが重要視された。もちろん時間が経つにつれ、中国医学を理解する必要性が高まっており、なかでも鍼治療のように、肯定的に評価する医療宣教師が登場した分野もあったのは確かである。

一方で医療宣教師は、基本的に西洋医学の優越性を強く信じ、中国に必要なのは科学的な西洋医学に違いないと考えていた。中国人西医も基本的に西洋医学を信奉し、中薬などの一部を除いて、中国医学は歴史上の価値しか持っていないと考えていた。王吉民はその代表である。このような西医の中国伝統医学に対する態度は、現在に至るまでも続いている。

【研究の方法】

本研究では医療宣教師が残した史料を主に利用した。特に中国医療伝道協会が発行した雑誌 *The China Medical Missionary Journal* は中国伝統医学の紹介、医療事業の報告などが記録されており、大変貴重な史料である。また、『中華医学雑誌』や『中華基督教会年鑑』のような雑誌、近代に大量に発行されている新聞、個人の日記などの漢文の史料もあわせて利用する。

【結論・考察】（400字程度）

本研究では、医療宣教師の中国医学、特に中薬に対する研究や認識について考察することで、西洋医学の土着化過程における西洋医学と中国医学の相互作用の一面を示そうと試みた。研究成果としては、主に次の4点が挙げられる。

一、中薬学委員会が医療宣教師の活動に大きな影響を与えていたことを明らかにした。

二、1920年代前後からは、学術的な目的から中薬に対する体系的な研究が始まり、学問的な研究が進むなかで、中薬に関する認識も変化していったことを明らかにした。

三、先行研究の論点を批判的に分析した上で、医療宣教師の伝統医学に対する認識を再考察した。先行研究では、医療宣教師の中国医学に対する認識が時代によって変化したと指摘されているが、実際の医療活動に役に立つものは高く評価し、西洋医学の見方からは理解できない理論については否定するような態度は、基本的にはあまり変わらなかった。

四、医療宣教師の伝統医学に対する認識が、西洋医学を修めた中国人医師にも大きな影響を与えていたことを明らかにした。